

(7) 3版

遊牧社会における土地利用を話し合う国際シンポジウムが先月、モンゴルの首都ウランバートルで行われた。国民の多くが遊牧を営むモンゴルだが、近年は都市への人口流入が激増。土地の一部私有化を認める法律が昨年施行され、さらに定住化が進んでいるという。司会を務めた国立民族学博物館の小長谷有紀教授＝写真＝に、議論の内容を聞いた。



遊牧民の土地利用を論議

シンポには、日本やモンゴルの研究者らが参加。古代から現代にいたる遊牧民と土地とのかわり、利用法や土地に対する意識などについて意見を交わした。

国立科学技術大学のS・ロアサンドルジ教授は、遊牧社会では「土地を自らの財産とはしたが、基本的に売ったり貸したりはしなかった」と指摘。「定住文化は土地を所有し、遊牧文化は土地を占有・支配した」と、両者の違いを示した。

移動を常とする遊牧が、豊かな草原を守ったとして高く評価される一方、「時代遅れ」と批判する声もあった。科学アカデミー地理学研究所・遊牧民研究センターのD・バザルグル所

長は「遊牧民から成る国家が発展した例は世界にない。定住文明への移行を促す必要がある」と強調した。

これに対し小長谷助教授は「従来の文明は、土地への集約的な投資で築かれてきた。その営みにこそ、今日の環境問題の根幹がある。分散によって成り立つ遊牧の特性を生かし、自前の開発プログラムを持つことが必要だ」と主張した。

シンポは最終的に、遊牧によって維持されてきた自然を破壊しない姿勢を共有して、閉会した。小長谷教授は「モンゴルの研究者と共に環境保全型の経済を作るため、大きな土台作りとなった」と評価する。

伝統文化と経済をどう融合させ、土地を活用していくのか。今後の取り組みに注目したい。(京田 友紀)